

2023（令和5）年度 東北アジア研究センタープロジェクトユニット報告書

提出 2024（令和6）年4月17日

代表者 辻森 樹

（本報告書はセンター内外への公開を原則とします）

研究題目	日本語：地質研究資料アーカイブと試料キュレーティング 英語：Archive and curating team on geological collections	
研究期間	2023（令和5）年度 ～ 2025（令和7）年度（3年間）	
研究組織 （センター教員・ 兼務教員・教育研究 支援者、RA等〔退 職した教育研究支援 者等は雇用期間を記 して記録するこ と〕）	氏名	所属・分野・職名
	●辻森 樹	東北アジア研究センター・教授
	高嶋礼誌	総合学術博物館・教授
	平野直人	東北アジア研究センター・准教授
	パストルガラダ ニエル	グラナダ大学、学際科学フロンティア研究所（クロスアポイ ントメント）
	吉田 聡	東北アジア研究センター・学術研究員
外部評価者	氏名	所属・職名
	小宮 剛	東京大学大学院総合文化研究科・教授
	西弘 嗣	福井県立大学恐竜学研究所・所長
センター支援	センター長裁量経費	100,000 円
	教育研究支援者（RA）	無
	研究スペース	無
ユニット組織設置目的と本年度の研究事業の成果の概要 （600-800字の間で専門家以外にも理解できるようにまとめてください。 Webなどで公開を予定しています。）	<p>近年、地質研究資料のデジタルアーカイブ化と研究試料（研究成果有体物を含む）のキュレーションに大きな期待が寄せられている。これは、科学の持続可能性と発展を追求し、社会への還元を目指すものであり、様々な規模の研究組織やチームにおいて、国内外の動向に即応し、世界標準の規格とシステムに適合する柔軟性と拡張性が必要とされている。その背景のもと、本ユニットは、過去と現在の地質研究資料をデジタル化し、標準物質の作成、データ駆動型解析の実施、統計解析用ソフトウェアの開発を行うことを目的としている。また、持続可能なキュレーション体制を構築するための基本プロトコルを複数の共同研究を通じて展開し、過去の優良コレクションを選定し、新しいデータを加えることで標本の可能性を再評価する。</p> <p>2023年度は、学術研究員を雇用することで、ユニットの実践的な運用が本格化した。また、NPO 法人地球年代学ネットワーク地球史研究所内の広い試料管理スペースを利用することによって、本学では対応できない有体物のキュレーションに必要な空間に関する制約を克服した。そして、同研究所に保管された膨大なコレクションからいくつかのコレクションに重要度の重み付けを行い、東北大学で特徴付けなどの作業を開始した。さらに、ソフトウェア開発のためのプログラム言語（RおよびPython）の勉強会を定期的実施し、計算機のみを用いた研究プロジェクトをいくつか開始した。</p>	
活動報告（研究集会や講演会などのプログラムを記してください。共同研究報告	本年度は研究集会の開催なし 本ユニットに関連する論文業績は次の通り： Yoshida, S., Mayika, K.B., Ishihara, Y. et al. (2024) <i>Geoscience Frontiers</i> 15:101771, https://doi.org/10.1016/j.gsf.2023.101771	

書に記載済みは除く)	Hernández-Urbe, D. & Tsujimori, T. (2023) <i>Geology</i> 51:678–682, https://doi.org/10.1130/G51052.1		
本年度のユニット運営を通じた実現した東北アジア研究センター組織への貢献についてアピール	東北アジア研究センターは、国内では唯一の「自然史研究分野を含む」文理融合型の文系の大学附置研究センターである。本ユニットは、同センターが推し進める人類史・歴史研究のデジタルアーカイブ化戦略と相補的な運用によって、近未来ビジョン追求のための「人新世」研究拠点構築の基礎となることが期待される。		
外部資金 (名称・金額)			
ユニットが運営する共同研究	東北アジアに分布する広域変成岩・変形岩の連続性検証手法の総合研究		
ユニット主催の研究集会・企画（共同研究報告書に記載していないもの）	研究会・国内会議・講演会など：0回		国際会議：0回
	研究組織外参加者（都合）：20人		研究組織外参加者（都合）：15人
学際性の有無	有	参加専門分野数：2	分野名称：地質学、岩石学、地球化学、年代学
文理連携性の有無	有	特記事項：	
社会還元性の有無	無	内容：	
国際連携	連携機関数：1	連携機関名：グラナダ大学	
国内連携	連携機関数：2	連携機関名：地球年代学ネットワーク地球史研究所、東京大学	
学内連携	連携機関数：	連携機関名：	
教育上の効果	参加学生・ポスドクの数：	参加学生・ポスドクの所属：東北大学理学研究科	
第三者による評価・受賞・報道など			
ユニット運営計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題	2023年8月から学術研究員を雇用したことで、ユニットの実践的な運用が本格化し、学術研究員が本ユニットに関係した論文業績を上げたことが本年度のハイライトである。しかし、東北大学で過去の優良コレクション試料の特徴付けなどの作業を開始したが、多々ある課題のなかでも、スペースの問題と装置は深刻である。具体的には、東北アジア研究センターには十分なスペースはなく、また、基礎的な機器分析装置を所持していない。		
最終年度	該当 [無]		

*ファイル名はUnitRpt_年度_代表者ローマ字（例 UnitRpt_2020_takakura）とする。